

小学生の外国語学習における不安と 他教科への苦手意識との関連

○坂本美沙紀¹・石野陽子²

(¹島根大学教育学部学校教育課程Ⅰ類・²島根大学教育学部)

目的

平成 29 年（2017 年）3 月、文部科学省は次期学習指導要領を公示した。その中でも、2020 年に小学校の外国語活動が第 3 学年から開始されることや、第 5 学年からは正式な教科として「外国語科」が新設されることは大きな注目を集めている。外国語活動では歌やゲームが中心であり、楽しそうなイメージである。しかし、児童にとって未知に近い英語ということで、抵抗感があったり理解に困難を覚えたりする児童がいるのではないだろうか。松宮（2009）が教員にアンケート調査を行ったところ、「外国語活動における消極的態度は性格に起因するもの」と 8 割の教員が答え、また 6 割が「児童が感じる不安は、英語の時間と他教科で違いがある」と答えたという結果が出ている。教員はそのようにとらえているようであるが、実際に児童が感じる不安は、外国語活動と他教科で違うのだろうか。本研究では、卒業研究の予備調査として児童にアンケート調査を実施し、外国語活動における不安と他教科への苦手意識について関連性を検証する。

方法

対象者：児童クラブに通っており、小学校で外国語活動の授業を受けている小学生 3-6 年生を対象とした。有効回答は男性 7 名、女性 1 名の合計 8 名であった。

調査期日：2017 年 11 月 6 日に実施した。

調査方法：質問紙法を行った。

調査項目：①外国語活動：松宮（2010）を参考に、外国語活動特有の質問項目を追加して、計 19 の項目で作成した。②国語：息吹（2009）らを参考に、国語特有の質問項目を追加して、計 12 の項目で作成した。③体育：上家（2013）らを参考に、体育特有の質問項目を追加して、計 12 の項目で作成した。④図画工作：中森（2016）を参考に、図画工作特有の質問項目を追加して、計 12 の項目で作成した。⑤学級適応感：江村（2012）らを参考に、児童が実際に想像しやすい場面の項目を

追加して、計 15 の項目で作成した。また、①-⑤全ての質問項目について、「そう思う」から「そう思わない」の 4 件法による回答を求めた。

結果と考察

各教科の人に関わる項目を抽出し、それぞれ英語との相関関係を分析した。その結果、英語-図画工作の間で相関が認められた ($r=0.64, p=0.089$)。つまり、英語の授業での対人関係に不安がない子どもたちは、図画工作の授業での対人関係に不安がないといえる。英語は話す場面が多いが、英語が上手くても下手でも他の人には迷惑をかけない。また、図画工作についても、自分の作る作品が上手くても下手でも、他の人には迷惑をかけない。それに対して体育では、チームで何かをすることが多いため、自分のプレーによって迷惑をかけないかと心配する可能性がある。また国語では、自分の答えによって、誰かに迷惑をかける場面は少ないと考えられるが、教科特有の要素として、授業場面では問いに対して、おおよその答えがあるため、その答えが間違っていないか、間違ふことへの不安があると考えられる。すなわち、自分の行動によって、他人に迷惑をかけることがなく、自分の行動に正解や不正解がないため、英語と図画工作に相関があったと推察できる。

今回の調査は予備調査であったが、対象者が極めて少なく、因子分析を行うことができなかった。また、有効な結果は得られなかった。本調査では、予備調査で用いた質問紙に答えにくい質問がなかったか等を再度検討しなおし、対象者を増やして研究を行いたい。